

「東西冷戦」から 「不確実性の時代」へ

戦後70年
経済科学の歩みと私の研究者人生

酒井泰弘

Yasuhiro Sakai

滋賀大学 / 名誉教授

I ピケティの衝撃と 新しい経済学への始動

—はじめに

2015年3月、私は関西の某大学卒業式に来賓の一人として招かれた。大きな会場の壇上右隅の一角にて、いつもの通り気楽に腰かけていた。そのとき、卒業生総代が当初お決まりの「答辞」を大きな声で読んでいたのだが、突然に次のような一節を発したのだ。いわゆる「ナイス・サプライズ」である。

「私達は今日を限りに大学を卒業しますが、恐らく生涯忘れられない本と出会い、大きな感動を覚えました。その本とは、フランスの経済学者トマ・ピケティさんの大著『21世紀の資本』なのです。生意気をいうようですが、『経済学はやっぱり大したもののだ!』と本当に思いました」

「ピケティの衝撃」とでも呼べる現象が発生している。しかも、大学卒業式という「この上ない見せ場」において、その衝撃は大会場を駆け巡り、出席者全員の心の琴線を振わせているのだ。まさに、「経済学はやっぱり大したもののだ! まだまだ捨てたものではない!」と感じ入った次第である¹⁾。

しからは、ピケティの近著がかくまで話題をさらった理由は何だったのだろうか。第一の理由はもちろん、近時における世界社会経済の危機的状況である。その状況を象徴する出来事は、2008年

1) ピケティの衝撃は世界中に及んでいるが、わが日本でもNHKの特別番組が組まれたし、解説本や特集本が幾つも出版された。その一つには池上彰・佐藤優(2015)があり、佐藤氏による次の文章が印象的である。「日本のピケティ・ブームには二つの理由がある。最初、『21世紀の資本』でなくて、『21世紀の資本論』と紹介された。…それから2番目は、格差を扱っているということで、…、ピケティ氏に仮託して、安倍政権批判を語りたいという思いがあった」(13ページ)。

2) 私と同世代の経済学者・岩田規久男氏氏(1981)は若き頃、次のような正直な意見を吐露しておられた。「近代経済学者で原子力発電問題を分析する著者が少ないという状況は、よ

のリーマン・ショックによるバブル崩壊・大量解雇・格差拡大、および2011年の東日本大地震・大津波・福島原発事故である。第二の理由として、それにもかかわらず、こういう危機的状況に対してまともな解答を用意しようとしないう、多くの経済学者たちの「逃げの姿勢」である。そこに、ある種の正義感と倫理観を持ったフランスの経済学者が颯爽と登場したのだ。「これより新しい経済学が誕生するかもしれない」という期待感が、人々の間で湧いてきても何ら不思議はなかったわけだ。私としては、このような期待が単なる期待や幻想に終わらず、本当に現実のものになってくれることを祈るばかりである²⁾。

本稿の主題は、「戦後70年」を振り返り、その間における「経済科学の歩みと私の学者人生」を回顧することである。この70年という短くて長い期間を振り返ると、それは「東西冷戦」から「不確実性の時代」への移行の時代であると特徴づけられる。ただし、東西冷戦と言っても、政治・軍事上の東西両陣営の対立のみを指しているのではない。私が狙上に乗せたいのは、それよりはむしろいわゆる「マル経」と「近経」との分離対立ないし切磋琢磨なのである。1989年の「ベルリンの壁」の崩壊と、1991年のソ連の崩壊・ロシア共和国の成立は、普通の意味での世紀の大事件であったことは間違いない。ただ、経済学者としての立場からみると、何か「別の感慨と郷愁に似た気持ち」が出てくるのを禁じ得ないのだ³⁾。

くえば、思想的基盤の脆弱さを自覚した彼らの禁欲のあらわれであり、より正確に言えば、禁欲に名を借りた怠惰のあらわれである」私見によれば、ほぼ同じような状況が2011年の福島原発事故まで続いていた。そして事故後においても、「禁欲に名を借りた怠惰」とも言える状態が(少し改善されたとはいえ)基本的に継続しているようである。

3) かつての「マル経」の重鎮だった大内兵衛氏(1970)を読むと、「マル経が主流、近経が傍系」という当時の図式がよく理解できよう。例えば、次のような文章が印象的である。「マルクス学は社会科学としては近代経済学よりももちろん立派な体系と内容をもっている学問だから、…それを勉強の方が近代経済学より直接に役立つであろう」(下巻、491ページ)。

私は次のような質問を発したい。「東西冷戦の解消は果たして、イデオロギーの異なる二つの経済学派について、その一方側の勝利と他方側の敗北を意味するのであるか」かの稀代の思想家・清水幾多郎氏によると、経済思想の発展は、二つの学派の対立と抗争から生まれる傾向がある。一つの思想が輝くのは、そのような対立・抗争があったからである。もし相手側が光を弱め、輝きを失うようになると、こちらの側の光や輝きも早晚失うことになるだろう。私自身の思想的立場は清水幾多郎氏とは必ずしも一致しないが、この点に関する同氏の鋭い観察には敬意を払いたいと思う⁴⁾。

本稿の構成を述べれば、次の通りである。次の第Ⅱ節において、戦後70年における私の研究者人生を回顧したい。私が教えを乞うた「六人のM先生」の人と業績に言及し、研究者としての私個人の立ち位置を明らかにしたい。この長き研究遍歴において、私が常に問うてきた問題は、経済と人間の心との間に、バランス良き関係を保つためには一体どうすればよいのか、ということであった。

さて、第Ⅲ節においては、個人史の背景にある客観的事情のほうに目を向ける。すると、戦後70年における経済科学の歩みは、「冷戦時代」から「不確実性の時代」への大転換であると特徴づけられることが判明する。いわゆる「マル経対近経」の対立構造、「一般均衡理論」の美学とイデオロギー、およびケインズ(Keynes)とナイト(Knight)という二人の「K先生」からの御教示が順次述べ

4) 清水幾多郎氏(1972)は、かつて戦後日本を代表する思想家の一人であった。同氏はウィットに富んだ文章と鋭い洞察力とを示すことで有名だった。例えば、次の文章は、今でも心をグサッと刺す文章であろう。「一般に思想と曖昧な言葉で呼ばれているものは、敵との関係においてのみ、生命と意味を持つことが出来る。…敵が弱くなった時、生命を失った時、宛も勝ち誇ったと見える思想は、実は、敵と同様に弱くなり、敵と同様に生命を失っている」

られる。深く長い暗闇と混迷の中にある「経済学の危機」を脱出するためには、ケインズの「蓋然性」やナイトの「不確実性」の概念の活用が有効であろうことが論じられる。最後の第IV節では、本稿の総括と残された課題について言及する。思うに、ピケティによる問題提起を今後に生かすためには、従来の視野の狭い機械的経済学の枠組みから離れて、学際的・総合的な社会科学を積極的に構築することの必要性が説かれるだろう。

II 経済と人間の心

—私の研究者人生

ドナルド・キーンさんの言葉

5年後の2020年には、日本でオリンピックが再び開催されることに決定した。マスコミ等の後押しがあったためか、東京で二度目の五輪開催を勝ち取ると、国内は一気に盛りあがったように見えた。だが、元アメリカ人で、日本人に最近帰化したドナルド・キーンさんは、このような風潮に著しい違和感を感じたという⁵⁾。

「今の私を形作る大きな体験の一つが、太平洋戦争中のアッツ島で目撃した玉砕です。上陸した私たち海軍を待っていたのは、自ら命を絶った多くの若者だった。今もあの光景は言葉にできない」

私はキーンさんより相当若輩であるが、今では残り少ない「戦前生まれ」の人間である。かの太平洋戦争の末期、アメリカB29爆撃機の編隊が何度も商都大阪を襲い、まことに大量の焼夷弾を投下した。そのたび毎に(実に35回に上ったという)、

「ウーン、ウーン!」と空襲警報が鳴り、停電で真っ暗の中で、私達家族全員は近くの防空壕に身を潜めた。ある時には、余りにも焼夷弾の投下量が多く、家の周囲は文字通り火の海となり、多くの死傷者が出た。台所のヤカンに水を入れて、ほうほうの体で2キロメートル離れた池まで逃げたものだ。あの時の惨めな光景は、十分言葉に表現できないし、永遠に忘れることが出来ない。この点で、キーンさんと私とは、70年前には敵同士であったものの、「戦争の理不尽さ」を体験した人間として、今や共通の感情を抱いているようである。

そして、上述した二度目の東京五輪決定について、キーンさんはこのように述べている。

「被災者ではまだ仮設住宅で生活している人がいます。仕事場のない人が大勢います。東北の人口がどんどん減っている。その一方で東京の町は明るい。みなさん、東北を忘れていてのではないのでしょうか」

このキーンさんの意見は正論であり、私も全面的に賛成の立場である。私の研究者人生において、23年間という長い期間、つくば学園都市という東京圏で生活してきた。東京にいと、ややもすれば東京中心に物事を考える習性がついてしまうようである⁶⁾。

「東京に良いことは、日本にとって良いことなのだ」

実際のところ、東京周辺に住む人間は、このような一方的な感情を抱くようになりがちである。「いや待てよ、東京イコール日本ではない」、「東京栄え

5) ドナルド・キーン氏(2014)は元来アメリカ人であり、戦時に日本語通訳として活躍された。同氏は戦後において、谷崎潤一郎・川端康成・三島由紀夫など、現代日本文学を世界中に精力的に紹介する労を厭わなかった。80歳を超える高齢の氏は、近時において日本国籍をとられ、「青い目をした立派な日本人」となられた。このようなキーンさんの経歴を考えると、「東北もう忘れられたか」と発する同氏の警告は、我々の心の琴線に響くものがある。

6) この言葉は、世界の自動車王たるGM会長による次の言葉を私なりに借用変換したものである。「GMに良いことは、アメリカに良いことなのだ」(What is good for GM is good for America)。

7) アダム・スミスには二つの主著がある。第一の主著が『道徳感情論』(1759)であり、第二の主著が『諸国民の富』(1776)である。両者の間には、その底に「共通の赤い糸」が

て地方が廢れる、これで果たして良いだろうか」という反対感情は、なかなか生まれがたいものである。政治も経済も教育もマスコミも、すべて東京中心で動いている。だが、それにもかかわらず、キーンさんの意見は、(東京の人を含めて) 全ての人の心の琴線を大なり小なり振わすことだろう。その理由は、「経済学の父」と尊称されるアダム・スミスがかつて注目したように、全ての人間には「共感」(sympathy) という根本的感情が存在しており、そこから正義感や反差別という派生的感情が生まれるからである。上述のように、ピケティさんの言葉が世界中に大いなる衝撃を与えたのも、同じような「連帯感情」ではないだろうか、と感ずるものである⁷⁾。

多くのM先生から人生感を学ぶ

私が夢多き中学生だったころ、イギリスの小説家コナン・ドイルの傑作『シャーロック・ホームズの冒険』を愛読したものだ。名探偵ホームズはある日、自分の「事件簿」をペラペラ捲りながら、相棒のワトソン博士にこう語った。

「M(エム)の項目は逸材ぞろいだな。モリアーティ教授は事件簿を飾るべき超大物だが、そのほかにも殺人請負人のモルガンが存在するし、ここにはメデュヤやマッシュズもいる。それから、ほらここには今夜の相手のモーラン大佐がお出ましたよ」

私はもちろん、ホームズのような稀代の名探偵ではないし、ドイルのような文筆の才能を持ち合わせていない。だが、私なりのいわば「人生簿」を捲ってみると、「Mの項目」がやはり圧巻であること

存在すると考えるのが自然である。スミスによれば、人間をいかに私利的な存在とみなしても、その性質の中に他人を思いやる原理——「共感」(sympathy)——がある。そして、構成員の間で共感の気持ちが高く、連帯意識が十分に形成された社会が「上等な社会」(good society)なのである。この点の詳細については、酒井(2010)第3章を参照されたい。

が分かるのだ。私の若き日の人生観は、多くのM先生の著作を読んだり、直接にお目にかかったことを通じて形成されたと言っても、それほど過言ではないだろう。その理由を以下に述べてみよう。

記憶を辿れば、はるか昔の1968年、私が神戸大学経済学部に入學したころ、世の中は大変騒々しい状態だった。いわゆる日米安全保障条約の改訂をめぐる国論が真つ二つに分かれていた。国会周辺はまるで「革命前夜」のように、とぐろを巻くデモ隊によって周囲を取り囲まれていた。私は友人とともにプラカードを書き、昼に街頭デモに参加し、夕方に有志の研究会に参加するというような、非常に多忙な毎日を送っていた。当時の学生生活は概して貧しく、月末にはおカネがなくなり、食パンに水道水を浸したような食事をすることも稀ではなかった。駄洒落ではないが、「腹が減って腹が立つ」(Hunger means Anger) ことも少なくなかったのである。

学生研究会の席上では、参加者の全員が自分の空腹をおくびにも出さず、むしろ立腹の程度を「百倍返し」に変えるような勢いでもって、翌朝まで口角泡を飛ばしていた。「人生をいかに生きるべきか。若者は社会正義の実現のために一体何をなすべきか。資本主義と社会主義の対立について、そのいずれの体制が勝利するのであるか」先輩の一人の口癖は、「かの天才マルクスの著作には、あのように書いてあるよ。マルクスなら現代日本の閉塞状況をこのように打開するだろうな」というものだった。「朱に交われれば赤くなる」とも言う。かくして、哲学者かつ経済学者のカール・マルクス(Karl Marx)こそが、若き私の人生の人生観に影響を及ぼした「第一のM先生」と相成ったわけである⁸⁾。

8)「初恋の味は忘れられない」とも言う。「第一のM先生」たるカール・マルクスが、私にとって「学問上最初の恋人」だったが、時間の経過とともに次第に距離を置くようになっていった。だが、マルクスを通じて知ったダンテの言葉「すべてを疑え」という金言は、今でも不断に実行している「研究人生の指針」である。私自身はこの金言に依拠して、マルクスまで疑うようになったわけである。

とは言うものの、私自身は別に学生自治会の幹部だったわけではない。それよりむしろ、私は運動よりは読書のほうがはるかに好きだった。そこで私は某研究サークルに積極的に参加し、遂には学内の研究会やクラブの全体を束ねる大組織のトップに祭り上げられてしまった。つまり、「学生会代表」という実に奇妙な肩書を頂戴したのである。

私が主宰する経済学研究会は、毎週金曜日の夕方5時に始まる約束だったが、困った事態によく直面した。実は、約束の開始時間を守らないばかりか、4時間以上の大幅遅刻や無断欠席を平気で行うマルキストの友人が何人もいたのである。青二才の私はある日、「Z君よ、君には社会正義を語る資格などさらさらないよ。仲間との約束さえ守ろうとしないのだからね」と叱責し、座を著しく白けさせた。その時のことである。普段は寡黙であった友人の一人が、珍しく意見を開陳したのである。

「マルクスもいいけど、決して神様ではないよ。マルクスは品格方正の人間とは言えず、エンゲルスから多額の借金をするし、女中との間で子供を作ったことすらあると聞いている。僕のようなごく普通の人間は、マーシャルのいう《冷静な頭脳と温かい心情》(cool head but warm heart)の方にむしろ心惹かれるね」

私は即座に反応した。「ああそう、ケンブリッジ学派の開祖アルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall) のことですね。僕もこれから本格的に勉強したいから、いろいろ教えて下さいよ」これが「第二のM先生」との遭遇である⁹⁾。

私が学部卒業後、大学院経済学研究科へ進学するにつれて、世の中の騒乱はひどくなる一方だっ

た。寡黙の友人からいろいろと助言を受けながらも、私のマーシャル研究は一向に捗らなかった。そこで、私は一念発起して、別の「美しい抽象世界」をあちこちら散策することにした。正直に告白すると、一種の現実逃避であったかもしれない。その「別世界の散策」とは、理学部数学科に(他学部から受講の) 正規の学生として出席し、年齢が少し下の理学部学生たちに交じって猛勉強することだった。その時期に私は、ガロアの理論、ルベーク積分、トポロジーなどの高等数学を集中的にマスターすることができた。理学部の学生たちは皆純粋で《温かい心情》の持主が多かったような気がする。しかしながら、私の心情は経済学と純粋数学との間で激しく揺れ動き、《冷静な頭脳》を維持することが相当難しかった。

「昭和40年(1965年)3月26日」—私はこの日の出来事が永遠に忘れられない。実は、まさにこの同じ日に、自分がかねがね尊敬していた二人の先輩を同時に失ってしまったのである。二人はともに私と同じ学部、同じ大学院であり、同じ研究サークルに属していた。その一人はGさんといって、はるか茨城県日立市の高校出身だった。Gさんは3月24日夜11時過ぎに、岡山県鷲羽山のホテルにて服毒自殺を図り、二日後の26日に空しくあの世に旅立ってしまったのだ。彼が神戸の下宿先に残した遺書には、次のような言葉が残されていた。

「僕は自由だ。というのは、もはやいかなる生きる理由も僕には残っていない。僕の模索した生きるための理由はすべて逃げ去った。そして他の理由をもはや想像することができない、ということである」

大人物であったと述べている。

9) 私が1960年代にアメリカに留学したころには、マーシャルよりもワルラスのほうが圧倒的に人気があった。しかし、ガルブレイス(1977)によれば、戦前のアメリカの大学では、マーシャルの名著『経済学原理』(1885)のほうがむしろ標準的なテキストであったようだ。このガルブレイス(1977)はマーシャルを評して、「予言者という評判と聖者の風貌」を併せ持った

Gさんは私より2年先輩の才人だった。彼の好きな言葉は「真摯」であった。「経済と人間の心」の問題に文字通り真摯に悩み続け、自由な人間の心を一見癒してくれるかのような高等数学の勉強に没頭していた。私が理学部数学科の講義に通うようになったきっかけは、このG先輩からの影響が相当に大きかったと考えている。

同年同月同日に病死したもう一人の神戸の先輩は、山口県熊毛町生まれで論客のHさんであった。彼の専門は金融経済学であったが、とにかく頭の回転が素晴らしく良く、それに立て板に水を流すような雄弁家であった。彼の余りにも早口であるのを咎める友への反論は、次のようなものであったと記憶している。

「早口で本当にすまん。僕の人生には、残された時間が余らないんだ。社会の矛盾を正したい気持ちで一杯なんだが、残念ながら十分な時間が残されていない。だから、こんなに早口で喋ってしまったよ。許してくれ」

Hさんが執筆した学術論文は常に優れて独創的であり、指導教官からも高く評価されていた。彼は自治会活動と研究会活動を同時にこなすことの出来るサムライであり、この中の後者のみを（決して器用とはいえない）私が引き継いだわけである。このHさんはGさんとも無二の親友であった。事実、Gさんは山口の郷里で病氣療養中のHさんをはるばる見舞っていたのである。

私がかねてより、二人の先輩(GさんとHさん)が近い将来において、日本や世界の経済学界をリードしていくような逸材であると信じて疑わなかった。ところがである。この二人が偶然であったとは

いえ、全く同じ日に他界する羽目になってしまった。私が当時受けた衝撃は余りにも大きなものがあり、その余韻は現在に至るも残っていると云わざるをえないのだ。「先輩のGさんとHさん、あの世から後輩の私たちを見守っていて下さい。経済学に人間の心を復活させるべく、微力を尽くしますから」というのが、今でも私の心の奥底に残る永遠のメッセージなのである。

私が純粋数学の勉強にやや疲れが見え始めていたころ、それこそ「天からの助けの手」が差し伸べられた。その助けとは、天野明弘先生（神戸大学）の御推薦を頂いて、はるか東北部のロチェスター大学へ留学する機会を掴んだことであった。ロチェスター大学経済学部は規模こそ大きくないものの、そこには世界に誇るべき数理経済学者が多数おられた。中心教授は何ととっても、一般均衡理論の創始者の一人であるライオネル・マッケンジー教授（Lionel McKenzie）であった。この「第三のM先生」の講義は常に荘厳そのものだった。だが、時に定理の証明に熱中すると、唇をチョークで白く染める癖があり、学生たちを愉快的な気持ちにさせたものだった。講義の中では、「モリシーマ」（森嶋通夫）、「ウザーワ」（宇沢弘文）、「ニカーイド」（二階堂副包）、「イナーダ」（稲田献一）、「ネギーシ」（根岸隆）など、英語風に発音された日本人らしい学者の名前が度々出てくるのが、誠に印象的であった。

今でも忘れられない思い出がある。その思い出とは、マッケンジー先生が黒板一杯を用いて一般均衡の存在証明を漸く完了された時、思わず眩かれた次の言葉である。

「おお、実に美しい!」(Oh, it's so beautiful!)

教室の最前列に陣取っていた私は、その言葉を決して聞き逃さなかった。その時、アメリカ流の経済学の強さと弱さとを同時に垣間見る思いがした。その時まで「善」や「真」のために勉強してきた若き私にとって、「美」のためにも奥義を極めようとしているマッケンジー先生の御姿は一瞬異様に映った。「空想的社会主義は美しい夢の社会であるとされるが、空想的資本主義もそれに劣らず美しい社会の実現であるのかなあ!」と、私は心の中で密かに呟いた。それと同時にまた、20歳代の院生時代に他界した先輩二人(GさんとHさん)なら、マッケンジー先生の御言葉「おお、実に美しい!」に素直に共感できなかっただろうなあ、」と思案を巡らせたものだった。繊細な神経の持主だった二人の才子は夭折した。反応がやや鈍な私が、歳月を多く重ねて、今や古稀の年齢に達している。とかく世の中は不条理そのものである。

私はロチェスター大学で多数の友人たちに恵まれた。私より1年上の学年には、グリーン氏(後にハーバード大学教授・学長)、同学年にはコーリラス氏(後にギリシャ銀行副総裁)や大山道廣氏(後に慶応大学教授)、直ぐ下の学年にはシャンクマン氏(後にシカゴ大学教授)や廣田正義氏(後に東京理科大学教授)などの俊秀がおられた。廣田氏はかの森嶋通夫先生の愛弟子であり、明けても暮れても「ロチェスターもかなり凄いが、阪大社研はもっと凄い所だぞ!」と喧伝するのにとても熱心だった。そのために、森嶋通夫先生(Michio Morishima)が、私にとっての「第四のM先生」という存在になった。

森嶋先生の本当の凄さについては、それから数年後、ニューヨークのヒルトン・ホテルで開催された国際計量学会北米大会(The North

American Meeting of the Econometric Society)に出席した際につぶさに体験した。森嶋先生はクライン教授が(ペンシルベニア大学)が司会された特別セッションの最後の所で、次のように高らかに力説された(英語のスピーチ原文も序に記録しておきたい)。

「マルクスは偉大な学者です。なぜなら、マルクスは死後百年を経た今日においても、学問的になお生き続けているからであります!」(Marx is so great. It's because he is still alive after 100 years of his death!)

その途端、ホテルの大ホールに出席していた聴衆全員が一斉に立ち上がり、万雷の拍手喝采がしばし鳴りやまなかった。「日本の森嶋」というより、まさしく「世界のモリシーマ!」という雰囲気がちまちに醸成された。

私は1971年秋、マッケンジー先生の御推薦を頂いたお蔭で、ピッツバーグ大学にて数理経済学系列の一連科目を担当することになった。具体的には、一般均衡理論・数理経済学・：マイクロ経済学・マクロ経済学・経済動学・経済数学などの大学院・学部科目を教えることになった。この時に特にお世話になった日本人の先生がおられる。その方は、先輩格で一橋大学の御出身であり、ピッツバーグ大学では計量経済学・統計学を御担当の眞栄城朝敏教授(Asatoshi Maeshiro)だった。この「第五の先生」および素敵な奥様との出会いは、私および家内のその後の人生の方向を決定づけたといっても、決して過言ではないだろう。

ピッツバーグ大学は学生数の多いマンモス大学であったが、同僚の先生方は温和で、学生たち

も好人物が多かった。ロチェスター大学で経験した《ぎすぎすさ》はもはやなく、もっと生き生きした《おおらかさ》が周囲の空気を支配していた。私は両大学のお蔭で、「厳しいアメリカ」と「楽しいアメリカ」という両面の生活を体験することができたのである。

「第六のM先生」と二人の「K先生」

ピッツバーグ時代において、決して忘れられないエピソードがある。それは私が自分の専門分野を「一般均衡理論」から「リスクと不確実性の経済学」へと転回するための、大きな契機となったエピソードである。

実は、私がピッツバーグ大学助教授であった時代、ゲーム理論の創始者の一人として著名なモルゲンシュテルン先生(Oscar Morgenstern)との出会いという僥倖に恵まれたのだ。この私にとっての「第六のM先生」がピッツバーグ大学にて特別講演されたおり、勇を奮って思い切った質問をぶつけてみた。

「先生、最近の経済理論は一寸元気がないようですが、どのようにお考えでしょうか」

モルゲンシュテルン先生は一瞬びっくりされたようであるが、やがてニコッと微笑まれて、このように答えられた。

「ええ、そうですね。でも、ミスター・サカイ、不確実性の経済学という新しい学問が興隆しつつありますよ。君はまだ若い研究者なのですから、この新分野を研究されるよう切にお勧めいたしますよ」

後から振り返るならば、モルゲンシュテルン先生の御言葉は私にとって「天上の綏君」に等しいものだった。この言葉を大きなきっかけとして、私の研究分野は、現実ばなれした抽象的の学問である「一般均衡理論」(general equilibrium theory)から、より現実的な応用学問である「リスクと不確実性の経済学」(economics of risk and uncertainty)の方面へ大きく舵を切ることになった。「人生、塞翁が馬」とは、まさしくこのことであろう。

もっと具体的に言うならば、モルゲンシュテルン先生からの御助言を受けて、リスクと不確実性の経済理論と応用という新分野が、当時どのような状態にあり、またどの程度有望なのかを詳しく調べてみた。すると、この新分野はまだ始まったばかりであり、国際的な学術雑誌に掲載される論文数もまだ限られていることが判明した。

私にとって好都合なことに、重鎮のアロー(Arrow)教授は別格としても、アカロフ(Akerlof)、スペンス(Spence)、スティグリッツ(Stiglitz)など、若手の面々は私とほぼ次世代であった。しかも、偶然の一致とはこのことで、これら四人の方々のイニシアルはすべて「A」か「S」であるのだ。私(Sakai)のイニシアルもたまたま「S」であり、しかも英語5字の中の3字までが「A」か「S」である！商都大阪の生まれで、アニマル・スピリッツ旺盛だった若きサカイは、「これは《アス》(AS)から縁起がいい！」と自己流に解釈してしまった¹⁰⁾。

それからというものは、朝から夕方までの大学の授業・講義では数理経済学を教えるものの、夕方以降の時間と週末すべてをリスク経済学の研究に当てることにした。大変なハード・スケジュールではあったものの、「驀進だ、驀進だ！」をスロー

10) 1970年代に一斉に開花した「リスクと不確実性の経済学」の旗手は、アロー(Arrow)、アカロフ(Akerlof)、スペンス(Spence)、スティグリッツ(Stiglitz)の四人であったと過言ではない。そこで、私はこれら四人のイニシアルが「A」か「S」であるので、この時代のことを「アスの時代」と呼んでいる。詳しくは、酒井(2010)を参照して頂きたい。

ガンにして、持ち前の馬力で何とか乗り越えてきたわけである。

それからややあって、1976年の春、私はあしかけ8年間に及ぶアメリカ生活にピリオドを打って、懐かしの祖国に帰ってきた。あの荒れ狂った大学紛争は嘘のように収まり、静かな研究生生活を送れる環境が再び整ったようだった。だが、一見平穏に見える大学キャンパスの住人になったものの、私は必ずしも満足できなかったのだ。「何かたりないなあ」という気持ちがあった。これは理屈の上の話ではなく、直観的に「何かおかしいぞ!」という感情が内面から彷彿と湧き上がってきたのだ。

留学前の日本は貧しく、経済学は私にとって「正義」の学問だった。だが、留学後の日本は金持ちになったものの、「効率」一辺倒の経済学が横行している。

「これでは経済学から《人間の心》が失われていくようだ。本当にこれでよいのだろうか?」

私はこう自問自答を繰り返しながら新世紀を迎え、早くも10年以上の時間の経過を徒に見送ってしまった感じがする。無為な時間とは、まさにこのようなものであろう。

既に述べたように、過去70年間その各段階において、私はいわば「六人のM先生」からいろいろ教えを乞うてきた。留学前の第一のM先生は伝説上のマルクス、第二のM先生は同じく伝説のマーシャル。アメリカ留学中には、第三のM先生として指導教官たるマッケンジー教授、第四のM先生として大先輩の森嶋通夫教授。そして、第五のM先生は兄貴分たる眞栄城朝敏教授。さらに、第六のM先生として研究上の助言者たるモルゲンシュテルン

教授。これら六人の先生方に対する私の恩義は計り知れないほど大きいものがある。

ところで、最近の20年間、私はこれら六人の「M先生」から「若干の距離」を置いて、二人の「K先生」のほうへ急接近している。その二人とはケインズ(Keynes)とナイト(Knight)であり、そのイニシアルはいずれも「K」である。

一方において、ケインズとはいうまでもなく「20世紀最大の経済学者」と言われ、いわゆる「ケインズ革命」を引き起こした人として有名である。だが、私は従来のケインズ研究において軽視されてきた側面、つまり「蓋然性論」の研究者としてのケインズの業績にスポットを当てたいと願っている。他方において、ナイトはケインズと同時代の人ではあるが、もう少し地味で目立たない人物である。だが、ナイトの「不確実性論」に関する業績は記念碑的なものであり、今も燦然と光り輝いている。

ケインズとナイト——両人は一見無関係に見えるかもしれないが、共通点が案外多いのだ。まず、二人ともに蓋然性や不確実性の概念などを導入することにより、従来の力学的経済学の方法を大きく変化させようとした。次に、二人の共通の先生は、何と私にとって「第二のM先生」、つまりマーシャルなのである。詳しく言うと、ケンブリッジのケインズはマーシャルの直弟子、時に鬼弟子であった。これに対して、ナイトはマーシャルの外弟子であり、いわば追っかけ弟子であった¹¹⁾。

このように眺めてみると、私の近時における「二人のK先生」は、ある意味で従来の「六人のM先生」の延長線上に位置する存在だとも見做すことができよう。人生の哲人たるマーシャルは、太平洋の両岸にわたって、その偉大な影を広く深く投影している。マーシャルの学問は決して効率一本槍で

¹¹⁾ ナイトとケインズの異同については、酒井(2015)が非常に詳細な議論を展開している。是非参照して欲しい。

はなく、正義と良心をも合わせ持っていた。「冷静な頭脳と温かい心情」(cool head but warm heart)というマーシャルの言葉ほど、「真の経済学」のあるべき姿を表現したものは他にないだろう。

戦後70年における私の研究方向が「一般均衡理論」から次第に「リスクと不確実性の経済学」へと傾斜していった大きな理由は、もはや明らかであろう。実際のところ、前者ではなく後者の学問の中に、温かい血の通った「人間の心」をもった学問を樹立できる可能性を大きく見出したからに他ならないのである。

Ⅲ 「東西冷戦」から 「不確実性の時代」へ

—背景事情の大転換

「赤いテキスト」と「青いテキスト」

—経済学の東西冷戦

20世紀は「社会主義対資本主義」の時代であり、「社会主義の興隆と崩壊」の世紀でもある。1917年10月、世界最初の社会主義革命が勃発した。帝政ロシアの首都サンクトペテルベルグを中心に、労働者と農民が権力を握った「ソビエト社会主義連邦」、つまり新生国家の「ソ連」が誕生した。以後、80年以上の長きにわたって、社会主義の盟主国(ソ連)と、資本主義の中核国(初めイギリス、後にアメリカ)との間で、猛烈な覇権争いがなされてきた。

私が大学生だったころ、「社会主義か資本主義か」という体制選択問題が人々の間で最もホットな話題であった。1960年代の頃の風潮では、スプートニクによる世界最初の人工衛星発射に成功したし、ガガーリンによる世界最初の有人人工衛

星の打ち上げを果たしたソ連のほうが、アメリカよりはるかに勢いがあるかのように見えたものだ。だが、最終決着はまだまだ着いたわけではなかった。

このような米ソ間の宇宙開発競争の煽りをくつてか、世界の経済学界は「社会主義派」と「資本主義派」に分裂し、相互間で激しい宣伝合戦を繰り広げた。その格好の例が、「赤いテキストか、青いテキストか」の分裂と対立の構図であった。ここではもちろん、赤いテキストとは「赤色帝国主義」、つまりソ連式社会主義を擁護する経済学教科書、青いテキストとは「青色帝国主義」、すなわちアメリカ流資本主義を支持する経済学教科書を意味した。

当時の日本の経済学界においては「マル経対近経」の基本的対立があった。東大や京大を頂点とする旧帝大系においては、マル経が圧倒的に優勢であった。しかも東大においては、ユニークな「宇野理論」が華々しい活躍を見せていた。これに対して、近経はマル経に比して「少数派」であり、一橋大や神戸大などの旧商大系を中心として、やや地味だが堅実な研究教育が行われていた¹²⁾。

1958年4月に、私は神戸大学経済学部に入學した。日本の大学では珍しいことに、神大では「近経」の先生方が多数派を占めていた。アニマルスピリッツ旺盛だった私は「近経」の授業だけに物足らず、「マル経」の先生方が沢山おられる京都大学にまで遠征することを厭わなかった。その時、京大のにわか友人から「マル経のバイブル」とも言える「赤いテキスト」を紹介された。その赤いテキストとは、マル経の最高権威と見做された「ソ連アカデミー経済学研究所編集の『経済学教科書』(訳書刊行は1959年)のことであった。それは全4分冊、千ページ以上から成る大部の書物であった。

¹²⁾ 池上彰氏は、私より丁度10歳若い有能なジャーナリストである。池上彰・佐藤優(2015)の中で、次のような興味ある歴史的事実を語っておられる。「私の学生時代、慶應義塾大学の経済学部は近代経済学とマルクス経済学の先生がちょうど半々で、近代経済学の授業もあるのですよ。その先生が言っていました。ソ連でいま、みんなが一所懸命勉強してい

るのは近代経済学なんだぞと」(35ページ)。これに関連して、佐藤優氏は「宇野理論」の有効性を興味深く語っておられる。「東大のマルクス経済学は宇野派の牙城ですから、そこで学んだ官僚たちは資本主義の限界を理解している」(33ページ)。欧米の経済学界にない日本のユニーク性が垣間見れる思いがする。

私はまずその分量の大きさに圧倒されたが、もっと驚いたことは第4分冊の「むすび」の中の最後の文章であった(実に、1050ページのところ)。

「社会の経済的発展の全行程を分析した結果、経済学の下す最も重要な結論は、資本主義は歴史的にみて破滅の運命にあり、共産主義の勝利は避けられない、という結論である。現代社会が共産主義に向かって進んでいく動きの基礎には、社会発展の客観的な諸法則がある。共産主義は、共産党に導かれ、マルクス・レーニン主義の理論で武装した、数千万の勤労大衆の自覚した創造行為の結果として生まれてくる。社会が共産主義に向かって前進していく動きを押しとどめることの出来る力は、世界には存在していない」

これはまさに自信に満ちた圧巻の結論だった。資本主義の破滅と共産主義の勝利は、歴史的必然の産物だ。即ち、それは社会発展の客観的法則以外の何物でもありえないという。

「神戸大学の君よ。近経なんか、勉強してもあかんよ。それはまるで、時計の歯車を逆転させるようなものじゃないか。神戸なんかさっさと辞めて、京都へおいでやす。大歓迎しませ」

かの「赤いテキスト」に従うかぎり、京都の友人の忠告は当時の私には「一理」あるように思われた。だが、「なにわ魂」の私は全面降伏というわけに行かず、神戸の下宿に戻って手元の書籍をむさばるように読み始めた。

近経にはもちろん、かの「赤いテキスト」に対抗する経済学教科書——いわば「青いテキスト」と

でも称せるもの——があるはずだ。そこで、私は近経を代表する学者サミュエルソンの手になるテキスト『経済学』を本棚から取り出した。これはミリオン・セラーの本であり(初版は1955年)、(かの「赤いテキスト」と張り合うかのように)幾度ともなく改訂版を出してきた。私の手元に今も残っている「第7版」(1967年)を開けてみると、最後の第40章「いろいろな経済システム」(Alternative Economic Systems)のところがやはり一番印象的であった。というのは、サミュエルソンはそこで「資本主義か社会主義か」という制度比較を行っていたからだ。思うに、当時のいわゆる「経済学の東西冷戦」の下において、これはあきらかに「赤い教科書」の下した結論を意識したものであったに相違なかろう。

「これら二つの経済システムについて、多くの後発国の人々はその優劣を決めかねているが、いずれ最終判断を下さなければならない。たとえアメリカがソ連より先行し続けるとしても、その場合でもアメリカが躓き停滞する一方で、ソ連がとんでもない飛躍的な成長率で発展することに成功することが起こりうるのだ。そのときには、態度未定だった中立国がいずれ数年後には、『フルスピードで前進』という独裁国家パターンを安易に模倣する誘惑に駆られるかもしれないだろう」

「青いテキスト」の御託宣は、このように遠慮がちであった。一方において、ソ連の「赤いテキスト」は、「資本主義の破滅と共産主義の勝利」は歴史的必然だ、という高らかな「進軍ラップ」を吹いていた。他方において、アメリカのこの「青いテキスト」によれば、「アメリカ先行の蓋然性が大きいとし

13) デブリュー教授の手になるモノグラフ『価値の理論——経済均衡の公理的分析』(1959)は恐らく、当時の一般均衡理論の到達点を示す名著であったろう。私を含めて数理経済学専攻の留学生たちにとって、この数学的に高度な書物の読破が必修条件であった。その「序文」を読めば、この名著が、軍事計画と研究推進との結合を目的として1848年に設立さ

れた(形の上では半独立の)「軍学共同体」——ランド・コーポレーション(RAND Corporation)という——から資金援助を受けていたことが判明する。また、アロー＝ハーンの大著(1971)の「序文」にも、次のような謝辞が記されている。「我々はアメリカ海軍研究所(the United States Office of Naval Research)に深く感謝の言葉を捧げたい。というのは、本書

ても、米ソ逆転の可能性はまだ残っているのだ。必然性と可能性——この両者の違いはとてつもなく大きいものがあった。

私は本稿を執筆中、これら二つのテキストの関係箇所を久しぶりに再読し、比較検討してみた。その結果、頭の上で考えるかぎり、「赤いテキスト」のほうが元気があり、当時の若者が血潮を湧き上がらせたことを想像するに難くないのだ。要するに、「経済上の東西冷戦」に関するかぎり、「東風が西風を圧倒している」という印象を当時抱いたのは、まことに無理からぬことであつたようである。

「一般均衡理論」の美学と限界

—「東西冷戦」のもう一つの置き土産

以上において、「経済学の東西冷戦」の一表現として、日本の学界における「マル経」対「近経」について言及した。いわゆる「源平の闘い」に見られるように、ライバルとの競争と対立はマイナスの悪影響だけでなく、切磋琢磨というプラスの効果をも生み出しうるのだ。

これに対して、私が留学した頃のアメリカにおいては(1950年代から60年代、さらには70年代にかけて)、経済学と言えばいわゆる「近経」一辺倒であり、『資本論』に言及する学者は殆ど皆無だった。その代り、「東西冷戦の別の表現」としてであろうか、強力なソ連式共産主義に対抗する形で、近経の数学的武装化を推進することが非常に盛んであった。

東西冷戦が先鋭化していた当時、一般均衡理論の推進プロジェクトに対しては、海軍を始めとするアメリカ政府関係機関からの資金援助が非常に潤沢であった。私はロチェスター大学大学院に留学中に、マッケンジー先生の研究助手を何度

か務めたことがあるが、その資金の出どころは恐らく海軍だったと記憶している。また、同経済学部の教室は図書館脇のハークネス館の二階にあった。その真上の3階には、上等の絨毯が一面に敷かれ、海軍士官らしき人々が自由に行き来していたのを目撃している。だから、今なら正直に告白できるが(皮肉なことに)、一般均衡論を勉強していた私自身、アメリカの歴大な軍事予算の中から、(ささやかな金額とはいえ)資金援助を受けていたわけである¹³⁾。

一般均衡理論の開拓者としては、私の指導教授たる帝王マッケンジー (McKenzie, 1954, 55, 59)、それに大家アロー (Arrow, 54) と才人デブリュー (Debreu, 54, 59) の両教授が有名であった。これら三人の名前のイニシアルを組み合わせ、彼らが活躍した時代を「MADの時代」(狂気の時代か?) と皮肉の向きもあったと聞いている¹⁴⁾。

一般均衡理論は、古今の経済学者たちが構築した中で恐らく「最も美しい知的建造物」であろう、と私は思う。この知的建造物を建造するためには、強力な「大黒柱」が何本か必要だ。そういう大黒柱の一つが、数学の大定理の一つである「不動点定理」(Fixed Point Theorem) である。実は、問題の関数が「一価関数」か(もっと一般の)「多値関数(対応)」かに応じて、次のごとき二種類の不動点定理が存在する。

第一の不動点定理(ブラウワーBrouwer, 1910)

いま X を n 次元実数空間 R^n における空でないコンパクトな凸集合であるとし、 f を X から X 自身への「連続関数」であると仮定しよう。すると、関数 f は集合 X の中で不動点を持つ。換言すれば、 $f(x^*) = x^*$ となるような点 x^* が X の中に存在する。

の執筆準備を進めるにあたって、我々は同研究所から——初めスタンフォード大学、次にハーヴァード大学との契約を通じて——継続的な資金援助を受けることが出来たからである。

14) 一般均衡理論の開拓者は、この三人だけには止まらない。

例えば、二階堂副包(Nikaido, 1956)とゲイル(Gale, 1955)の両教授の名前をも併記しておく方が公平というものだろう。二階堂先生は私とも懇意であり、「日本人だから、ペーパーを出すのが少し遅れたのですよ」と正直に告白しておられたのを今でもよく覚えている。

第二の不動点定理(角谷静男Kakutani, 1941)

いま X を R^n における空でないコンパクトな凸集合であるとする。さらに、 f を X から(X の部分集合の全体) 2^X への「上半連続写像(ないし対応)」とし、 X 内のあらゆる点に対して、その値域 $f(x)$ が X の空でない凸集合であると仮定する。すると、写像 f は集合 X 内で不動点を持つ。すなわち、 $f(x^*) \ni x^*$ となるような点 x^* が X の中に存在する。

「角谷の不動点定理」とは、「ブラウワーの不動点定理」を一般の「多値写像(ないし対応)」の場合にも適応できるように一般化したものである。こういう自分の名前の付いた数学定理を発見した人は、まことに幸福というべきであろう。

ちなみに、角谷静男先生は旧制一校文系の出身で、東北帝国大学理学部数学科へと進学した。後には、アメリカ留学を行い、プリンストン大学にて「応用数学の天才」フォン・ノイマンの研究助手を務めたという、異色の人財だった。注目すべきことに、これら二つの不動点定理とともに、「ゲーム理論の聖典」とも言われるフォン・ノイマン/モルゲンシュテルン(1944)『ゲーム理論と経済行動』の中で引用されているのだ。

私のロチェスター時代の畏友・廣田正義氏(2004)は、在りし日の角谷静男先生を回想して、次のような名文を書き残している。

「角谷静男先生は帰国の度に尊敬する岡潔先生宅に赴き数学分野の研究テーマ等の議論をされたそうですが、《人のやった仕事の一般化の論文を書いてはいけない、なぜ君はそのような論文を書くのか》と度々お叱りを受けたそうです。岡先生としては、経済理論にとって重要である《角谷の

不動点定理》すら、単なるブラウワーの一般化にすぎないと解釈されていたのでしょうか。お二人の会話から、現在の日本には少なくなった一流を目指すべきとする、旧制高等学校的精神の構えの一環を鑑みることができます」

断っておくが、これら二つの不動点定理を理解するためには、幾つかの数学的準備作業が必要である。まず「連続関数」または「上半連続写像」とは何か、次に「空でない凸集合」とは何か、「不動点」とは何か。これには厳密な数学的定義が必要であるが、紙面の都合上ここではすべて割愛せざるを得ない¹⁵⁾。

さて、1950年代から60年代にかけて一世を風靡した一般均衡理論は、「不動点定理」という名の「神の手」を用いて、資本主義経済の「解剖」を見事に行った。次に掲げる「存在定理」は——私が知る限り——数理経済学の記念碑的業績と見做された¹⁶⁾。

以下では、まず「一般均衡の厳密な定義」を与え、その後に「一般均衡の存在定理」を紹介しておきたい。簡単に言うならば、当該の市場経済システムは、各消費者、各生産者、および各市場での需給均衡によって特徴づけられる。だが、これを数学的に厳密にいう段になると、次のごとく表現がやや難しくなる¹⁷⁾。

市場経済システム \mathcal{E} において、第 i 消費者は、「消費可能集合 X_i 」を持ち、その中に自己の「選好順序 \succeq_i 」を導入する。第 j 生産者は、投入産出関係を示す「可能集合 Y_j 」を持つ。そして、各消費者の初期点を形成するのは、「初期存在量ベクトル ω 」である。すると、市場経済 \mathcal{E} は抽象的には、 $\mathcal{E}=($ 各消費可能集合と各選好順序、各生産可能集合、総

15) 詳しくは、酒井泰弘の最新書(2015)、第6章を参照されたい。

16) 当時の日本人の多くは、一般均衡理論の基礎を勉強するために、留学前には二階堂副包(1960)、そして留学中にはカーク/サポスニック(Quirk&Saposnik, 1968)を必死に読んだものだった。

17) 以下に出てくる諸定義や諸定理は基本的に、デブリュー(1959)に依っている。初期の留学生たちは、連日連夜ウンウン唸りながら、この「冷たく美し過ぎる高級専門書」の「解説作業」に励んだものだった。

初期存在量) = $((X_i, \leq_i), (Y_i), \omega)$ と書くことが許されよう。各消費者が目指すのは選好順序で図った「満足極大化」であり、各生産者が意図するのは価格 p_i で測った「利潤極大化」である。しかも、問題の需給均衡とは、各財について「総生産量 = 総消費量 + 初期存在量」なる等式が成立することだ。以上のことを正確に書いておくと、次のようになる。

定義(市場均衡とは)

当該の市場 $\mathcal{E} = ((X_i, \leq_i), (Y_i), \omega)$ が「均衡」であるとは、次の諸条件を満たす(各消費ベクトル、各生産ベクトル、価格ベクトル) = $((x_i^*), (y_i^*), p^*)$ が存在することを言う。

(a) 各 i に対して、 x_i^* は(順序 \leq_i で測って)「自己の選好の最大化」を実現している。

(b) 各 j に対して、 y_j^* は Y_j 内で(均衡価格 p^* で測って)「自己の利潤の最大化」を実現している。

(c) $x^* = y^* + \omega$ すなわち、総消費量 = 総生産量 + 総初期保有量が成立している。

いまや、角谷の不動点定理を用いて、一般均衡の存在定理を証明するすべての準備作業は完了している。

一般均衡の存在定理(マッケンジー、アロー、デブリュー等)

いま全ての i と j に対して、下記に列挙する諸条件 (a.1)、(b.1) – (b.3)、(c)、(d.1) – (d.4) が全て成立すると仮定しよう。すると、当該の市場経済 $\mathcal{E} = ((X_i, \leq_i), (Y_j), (\omega_i), (\theta_{ij}))$ には、上で定義した「一般均衡」が確かに存在する。

(a) X_i は閉なる凸集合であり、下に有界である。

(b.1) X_i には消費の飽和点が存在しない。

(b.2) X_i 内のあらゆる x_i に対して、優位集合 $\{x_i \in X_i \mid x_i \geq_i x_i'\}$ および劣位集合 $\{x_i \in X_i \mid x_i \leq_i x_i'\}$ は X_i 内の閉集合である。これは選好順序 \geq_i が上にも下にも連続であることを示す。

(b.3) X_i 内の任意の2点 x_i^1, x_i^2 に対して、また区間 $(0, 1)$ 内の任意の実数 t に対して、 $x_i^1 >_i x_i^2$ ならば $tx_i^1 + (1-t)x_i^2 >_i x_i^2$ がなり立つ。これは優位集合の凸性を表わす。

(c) X_i 内には、 $x_i^0 \ll \omega_i$ となるような点 x_i^0 が存在する。例えば、もし各消費者が初期に保有する各財がすべてプラスであれば、この条件は確かに満たされている。

(d.1) $0 \in Y_j$ すなわち、生産活動を行わないことも許されている。

(d.2) Y は閉じた凸集合である。だから、 Y 内の2点が生産可能ならば、その中間点も生産可能である。

(d.3) $Y \cap (-Y) \subset \{0\}$ このことは、もし $y \in Y$ ならば $(-y) \notin Y$ であること、つまりインプットとアウトプットの相互入れ替えは認めないことを意味する。

(d.4) $Y \supset (-\Omega)$ これは生産可能集合がマイナスの象限を含むこと、従って生産の「自由廃棄処分」を許すことを意味する。

もうこれ以上「変な記号と数学的表現」を続けるのは辞めよう。現時点でしみじみ述懐してみると、一般均衡の存在定理は、当時の「経済学の東西冷戦」の勝利に貢献する、という特別の意味があったのだらうと推測する。もしそうでないと、当時の数理経済学者たちの「異常な情熱」はとても理解できないだらうと思う。若き私自身は幸か不

幸か、かかる「熱気のスパイラル」の中にいたのである。

このような一般均衡の存在定理を側面からサポートするのが、以下のごとき「厚生経済学の基本定理」である。

厚生経済学の基本定理

いま当該の交換経済が「正常な状態」にあると想定する。すると、次の二つの性質が成立する。

(1) 市場の需給均衡は、いわゆる「パレート最適」を実現している。

(2) もしパレート最適な状態が与えれば、その状態を実現させる初期保有点と価格ベクトルを見出すことができる。

これは端的に言えば、「競争均衡はパレート最適であり、その逆にパレート最適は競争均衡である」ということになる。換言すれば、市場均衡は「一種の最適性」を実現しており、その逆も真である、と宣言している。これは市場経済、ひいては資本主義の「美化」をサポートするものであろう。しかも、そのように早とちりする人々は少なからず存在したし、現在でも相当に存在するようである。

この点について、パティンキン(1973)による次の言葉は非常に興味深いものがある。

「シカゴにおける私[パティンキン]の学生時代はかくかくたるものであったが、まことに皮肉に感じたことがある。その皮肉とは、一方において、社会主義者のオスカー・ランゲが、完全競争市場によって実現されたパレート最適の美しさを称賛していた、ということだ。ところが他方において、フランク・ナイトは、パレート最適から導出された厚生

経済上の帰結をより慎重に分析し、その有効性が非常に限定されたものであることを学生に伝授していたのである」

ナイトは上述の「市場均衡とパレート最適の同値性」を全く好まなかった。事実、ナイトは市場経済のワーキングとパフォーマンスについて、実に厳しく多角的に批判している。ナイトはもちろん社会主義者では全くなく、むしろ「資本主義者」である。それだけに、「市場万能論」に対するナイトの攻撃の矢は鋭く、相手の胸に深く突き刺さるようだ¹⁸⁾。

ナイトが放つ第一の矢は、個人主義的方法論への批判である。ナイトによると、消費や生産の活動単位は、一人一人バラバラの個人というよりも、個人の小集団としての「家族」なのであるが、この点は一般均衡論者の多くが看過している。第二に、個人は動かざる所与の独立単位ではなく、むしろ広範な社会経済システムの中で生まれた産物である。とくに、各個人の欲求や効用を決めるのは、これら個人たちを取り囲む文化的環境である。第三に、財やサービスが限りなく小さく分解され、また摩擦を伴うことなく円滑に移動できる、という「可分性」や「可動性」の仮定は恐ろしく非現実的である、とナイトは批判している。第四の矢は、人間が全知全能の完全人であることへの批判である。「完全知識」の想定は非現実的で、到底受け入れられない、とナイトは糾弾する。第五に、とくに売り手と買い手の間で知識量が異なるのが一般的である。

第六の矢は、効率性と倫理性的の関係に向けられる。人間の欲求一般を満たすか満たさないかの効率性ではなく、具体的に欲求のどんな性質に関わるのか、その倫理的判断を下す必要がある。例

¹⁸⁾ 市場均衡の美学に対するナイトの異論は、今日ではますます光彩を放っている。その詳細については、酒井泰弘(2014)を参照して欲しい。なお、ナイトの重要論文の殆どは、エミット編(1999)『フランク・ナイト精選論文集』第1巻、第2巻の中に収録されている。

えば、麻薬や銃器の最適配分を論じること自体がナンセンスというべきだ。第七に、自由競争は次第に競争者の人数を減少させ、独占化の傾向を持つ。ナイトによれば、自由競争という最初の想定は、早晚崩れる運命にある。第八に、各個人の欲求や効用のレベルは決して独立的存在ではなく、むしろ他人の欲求や効用のレベルによって影響を受けがちである。「他人にみせびらかせたい」というような、ヴェブレン流の「誇示的消費」の存在も無視できない。

第九の矢は、交換システムにおける通貨のあり方に向けられている。ナイトによれば、システムの円滑な運行のためには、通貨流通を自由放任のままに任せるのではなく、むしろ通貨の適当なコントロールが必要である。第十に、(需要全体を構成する)投資と消費の配分について、その間の適切な配分が自由競争によって自動的にもたらされるものではない。これら二つの矢については、ナイトはケインズ的であるとさえ言うそうである。第十一に、不確実性下の個人行動のあり方に向けられている。ナイトによれば、市場における個人行動は、不確実性への合理的対応を保証するものではない。

最後の十一の矢は、極めて強烈であり、いかにもナイト好みである。その批判の矢は、生産と分配と倫理との間の三者間関係に向けられている。ナイトによると、人によって資産や所得の格差が存在するが、そのような格差は必ずしも倫理的に正当化できない。各個人の持つ能力の格差は、親の財産や相続の状態によって決まることが多い。初期時点で甚だしい資産格差がある場合、その格差が市場取引によって縮小される程度は微々たるものであるかもしれない。たとえ市場均衡がパレート最適を実現しているといっても、貧富間の格差

が大幅に解消している保証はないのだ。「生まれながらの貧乏人」は、市場取引後もやはり貧乏人のままであり、「金持ち」との間の資産・所得・教育格差は依然として残るかもしれない。それどころか、次世代への財産相続を通じて、かかる格差はむしろ拡大するかもしれない、とナイトは考える。

このようなわけで、ナイトは「経済と倫理の関係」に対して、鋭く厳しい批判の矢を放っていた。だが、私の見るところ、「ナイトの矢」は、東西冷戦という「歴史の荒波」の中で軽んじられ、時には力尽きてしまった感があった。

だが、まさに「光陰、矢のごとし」である。後年、社会主義社会が突如崩壊し、資本主義社会もバブル崩壊を経験するようになってくると、「ナイトの矢」がブーメランのように再び舞い戻り、さらに「ケインズの不確実性」も人々の話題の中心になりつつある。まさに、「新しい不確実性の時代」の到来である。

新たな「不確実性の時代」の到来

ここで先ず注意して欲しいことがある。それは、本稿で「不確実性の時代」という場合、二つの異なる意味が存在するということだ。

第一の意味は、巨人ガルブレイスが同名のミリオン・セラー(1977年)の中で使用した意味である。例えば、彼は次のように述べていた。

「我々はここにおいて、19世紀の経済思想に見られる確実性と、20世紀の現代が直面する諸問題を取り巻く不確実性との比較検討を行うであろう。前世紀においては、資本家は資本主義の成功、社会主義者は社会主義の勝利、帝国主義者は植民地支配の成功、そして支配階級は自分たちの

統治支配をそれぞれ確信していた。ところが、このような確実性については、今日まで生けるものが殆どないのだ。人類が今日直面する諸問題の複雑性のことを考慮するならば、確実性がなお残存という考え方自体が奇妙きてれつなものであろう」(「序——不確実性の時代について」より)

ガルブレイスによれば、19世紀の各経済思想は100%確実なものであり、その有効性に対する疑念は人びとの間で疑われることがなかった。ところが、20世紀に入ると、各経済思想の「確実性・信頼性」に疑念が入るようになり、利害関係者の間ですら十分信じられないという「不確実性・不信感」が抱かれるようになったという。たとえば、資本主義の成功を確信していない資本家がいるかもしれない。また、社会主義の勝利をそれほど信じない社会主義者や、植民地支配の動揺を感じている帝国主義者や、さらには自分たちの統治支配の揺らぎを感じている支配階級も存在するようになった。

このようにガルブレイスのいう「不確実性の時代」とは、全ての知的体系がかつての信頼性を消失した「混沌たる時代」のことを意味していた。その背景事情として、彼の名著が出版された年が1977年であった、ということ念頭に置く必要がある。この前後において、戦後しばらく続いたケインズ経済学の優位が揺らぎ始め、フリードマンやルーカスをはじめとする「反ケインズ主義」が主役の座を奪おうとしていたのである。ケインズ思想に好意的だったガルブレイスですら、ケインズの財政金融政策の有効性に限界を感じ始めていたのかもしれない。ざりとて、もともと制度主義者であったガルブレイスは極端な形での「市場原理主

義」の陣営に加わることは到底出来なかった。「ケインズに全幅の信頼を寄せることはできないし、ざりとてフリードマンの極論には全く肌が合わない。今や、100%確実な経済思想はもはや存在しないのだ」、ガルブレイスはこのように言いたかったのだろう。

ところで、私が『不確実性の経済学』を執筆していたのは、まさにこのような時期だった。若かった当時の私は、ガルブレイスの本『不確実性の時代』を読めば、そこから重要な知識が入手できるだろうと思っていた。だが、それがとんでもない間違いであることに直ぐに気づいたのだ。というのは、私の本で扱うのは「リスクや不確実性が経済活動にどのような影響を与えるか」ということであつたのである。それに対して既に述べたように、ガルブレイスの本の基本的立場は、リスク・不確実性事象の存在や影響にほとんど言及することなく、むしろ現存する諸々の経済思想がいずれも頼りなく揺らいでいる」ということを力説することだった。「似て異なるもの」とはまさにこのことだろう。

新世紀に入って、リーマン・ショックや世界同時金融不況(2008年)、東日本大震災と原発事故(2011年)など——いわゆる「想定外の現象」が輩出している。それと同時に、「想定外」を想定する経済学者の二人——ケインズとナイト——が再びスポットを浴び始めている。

曰く、「ケインズに戻れ!」、「ナイトに戻れ!」。こう号令をかけるのは易しい仕事であろう。だが、現代の我々はケインズやナイトに学びつつ、これら二人の天才を乗り越えていかなければならないのである。

IV 「不確実性の時代」を超えて

—おわりに

「歲月人を待たず」という。すでに戦後70年である。この間において、経済科学の歩みは決して一様ではなく、実に様々のものがあつた。とりわけ、「神国日本」から「占領日本」への大転換を経験した私にとって、その研究者人生は「山あり谷あり」とならざるを得なかつた。

ガルブレイスの名著『不確実性の時代』(1977年)が出版されてから、既に40年近くの歳月が流れた。私自身のことについても、最初の単著『不確実性の経済学』(1982年)が上梓されてからも、35年ほどの星霜が流れている。この2005年夏に、私は最新書『J. M. ケインズとフランク・ナイト——「不確実性の時代」のための経済学』を世に送り出したが、経済科学の現状に対して十分な満足感を覚えているわけではない。それよりはむしろ、この不確実性の時代を如何に乗り越えることができるだろうか、ということが喫緊の重大問題であるように思われるのである。

こういう悶々たる気持ちでいた頃、私は古い本棚の片隅に非常に懐かしい「経済学論文集」を見つけた。その書物は遙か1969年1月22日、私がロチェスター大学の院生時代の最初の正月に、大学書店から購入したものだ。その本とはニューマン(Newman, P.)が編集した当時最新の論文集で、その正確な書名は『数理経済学の読み物——第一巻、価値理論』(Readings in Mathematical Economics, Volume 1: Value Theory)という。当時の私はこの当時の最新書を貪るように読んだ。そのことは、表紙が今や一部破損しており、赤鉛

筆やボールペンで書入れた箇所が少ないことから判明する。

「温故知新」とはいうが、私はそこに収録された計29本の論文を眺めて、今さらながら記憶と感銘を新たにした。これらの原論文の著者名および出版年を列挙しておく、次のようである。

- (1) クーン／タッカー(Kuhn & Tucker, 1950)、(2) アイゼンバーグ(Eisenberg, 1961)、(3) トンプキンズ(Tompkins, 1964)、(4) 角谷静男(Kakutani, 1941)、(5) ダビンス／スペインア(Dubins & Spanier, 1961)、(6) ホーキンス／サイモン(Hawkins & Simon, 1949)、(7) デブリュー／ハースタイン(Debreu & Herstein, 1953)、(8) ゲイル／二階堂副包(Gale & Nikaido, 1965)、(9) マン(Mann, 1943)、(10) ゲイル(Gale, 1955)、(11) クーン(Kuhn, 1956a)、(12) クーン(Kuhn, 1956b)、(13) 二階堂副包(Nikaido, 1956)、(14) 二階堂副包(Nikaido, 1957)、(15) マッケンジー(McKenzie, 1955)、(16) オーマン(Aumann, 1964)、(17) スミシーズ(Smithies, 1942)、(18) ランゲ(Lange, 1945)、(19) メッツラー(Metzler, 1945)、(20) 根岸隆(Negishi, 1962)、(21) ゲイル(Gale, 1963)、(22) デブリュー(Debreu, 1954)、(23) ハースタイン／ミルナー(Herstein & Milner, 1953)、(24) マランヴォー(Malinvaud, 1952)、(25) 横山保(Yokoyama, 1953)、(26) ハウタッカー(Houthakker, 1950)、(27) 宇沢弘文(Uzawa, 1960)、(28) バローネ(Barone, 1935)、(29) アロー(Arrow, 1950)。

以上の29本の論文中に、日本人の名前が載っている(単著または共著の)論文が(4)、(8)、(13)、

(14)、(20)、(25)、(27)の計7本の多きに上る。アメリカ在住の角谷静男氏をどう扱うかは別にしても、いわゆる「論文占有率」は20%以上の大きさである。言うまでもなく、1950年代や60年代のわが国は、英文タイプもコピー機も十分利用できなかった「貧乏国日本」であった。それでも、日本の学者たちは「空腹」(hunger)を「立腹」(anger)に変換し、「学者魂」を十二分に発揮してきたのだ。

ロチェスター時代から計算しても、半世紀近くの年月が経っている。あれ以来確かに、日本は豊かになり、1990年までに「経済大国」と言われるまでの地位に上り詰めた。だが、その後は「失われた20年」を経て、日本社会の停滞ぶりは著しいものがある。しかも、沈滞しているのは、何も日本のGDPの大きさばかりではない。世界における日本の経済学者の「占有率」が近年著しく低下する傾向にある。

かつて「モリシーマ!」と欧米の学者たちに愛称された森嶋通夫先生の雄姿は、もはや伝説の中でしか見られないのだ。この森嶋先生の晩年の著作の一つに、『なぜ日本は没落するか』(1999年)がある。この本は、同先生がかねがね試みてみたいと思っていた、経済学、社会学、教育学、歴史学などを取り混ぜた社会科学領域での一種の学際的総合研究——「交響楽的社会科学」と呼ぶもの——である。我々後輩の者は、森嶋先生を「良きお手本」として「交響楽的社会科学」の構築の道を慕進する必要があるだろう。

幸いにして、「はしがき」の所に触れたように、ピケティという名の「新進気鋭の経済学者」が現われた。彼は私より遥かに若いという点で「新進気鋭」である。フランス生まれの彼は、名門のMITにて助教授まで務めた男であるが、アメリカの空

気に全く馴染めず、郷里のパリに戻ってきた。戦後70年の節目にあたり、「ピケティ現象」という新風が学界を席卷しているのは、誠に喜ばしいことだ。わが「瑞穂の国」の土壤の中から、ピケティに続く元気な若者が輩出するだろうことに希望を託して擱筆したいと思う。

【付記】

本稿の成るについては、平成23～25年度科学研究費(基盤研究(C) No.25512010から部分的に資金援助を受けている。田島正士氏(滋賀大学大学院経済学研究科)やリスク研究センターのスタッフからは、編集上のサポートを得ることができた。深く感謝する次第である。

参考文献

- ◎ Arrow, K.J. & Debreu, G. (1954) "Existence of an Equilibrium for a Competitive Economy," *Econometrica*, Vol.22, No.3.
- ◎ Arrow, K.J. (1970) *Essays in the Theory of Risk-Bearing*, North Holland.
- ◎ Arrow, K.J. & Hahn, F.H. (1971) *General Competitive Analysis*, Holden Day.
- ◎ Akerlof, G. (1970) "The Market for Lemons," *Quarterly Journal of Economics*, vol. 84, No.3.
- ◎ Biven, W.C. (1989) *Who Killed John Maynard Keynes*, Dow Jones-Irwin. ビブン、斎藤誠一郎訳(1990)『誰がケインズを殺したか』日本経済新聞社。
- ◎ Cassidy, J. (2009) "Postscript: Paul Samuelson," *The New Yorker*, December 14, 2009.
- ◎ Debreu, G. (1959) *Theory of Value: An Axiomatic Analysis of Economic Equilibrium*, John Wiley & Sons.
- ◎ De Vroey, M. (2010) "Dead or Alive? The Ebbs and Flows of Keynesianism over the History of Macroeconomics," Discussion Paper, University of Louvain, Belgium, August 2010.

- ◎Dobb, M. (1958) *Capitalism: Yesterday and Today*, Lawrens & Wishart. (ドップ、玉井龍象訳〔1959〕『資本主義—昨日と今日』合同出版社。)
- ◎Doyle, Conan (1892) *The Adventures of Sherlock Holmes*. ドイル、延原謙訳(1989)『シャーロック・ホームズの冒険』〔改版〕新潮社。
- ◎Emmit, R.B. (ed.) (1999) *Selected Essays by Frank H. Knight, Volume 1: "What is Truth" in Economics?*, Univ. of Chicago Press.
- ◎Emmit, R.B. (ed.) (1999) *Selected Essays by Frank H. Knight, Volume 2: "Laissez-Faire: Pro and Con*, Univ. of Chicago Press.
- ◎Gale, D. (1955) "The Law of Supply and Demand," *Mathematica Scandinavica*, Vol.3.
- ◎Galbraith, J. K. (1977) *The Age of Uncertainty*, Houghton Mifflin. ガルブレイス、都留重人訳〔1978〕『不確実性の時代』TBSブリタニカ; 斎藤精一郎訳〔2009〕『不確実性の時代』講談社学術文庫。)
- ◎Hodgson, G. M. (2011) "The Eclipse of the Uncertainty Concept in mainstream Economics," *Journal of Economic Issues*, Vol. XLV, No.1.
- ◎廣田正義(2004)「角谷静男先生を偲ぶ——数学の業績と経済学への貢献」『経済セミナー』第597号、日本評論社。
- ◎池上彰・佐藤優(2015)『希望の資本論——私たちは資本主義の限界にどう向き合うか』朝日新聞出版。
- ◎岩井克人(2015)『経済学の宇宙』日本経済新聞出版社。
- ◎Kakutani, S. (1941) "A Generalization of Brouwer's Fixed Point Theorem," *Duke Mathematical Journal*, Vol. 8, No. 3.
- ◎キーン、ドナルド(2014)「高揚する東京の街——東北もう忘れたか」『朝日新聞』平成26年1月15日号、「文化」欄。
- ◎ケインズ学会(編)、平井俊彰(監修)『ケインズは、《今》、なぜ必要か』作品社。
- ◎Keynes, J. M. (1921) *A Treatise on Probability*, Macmillan.
- ◎Keynes, J. M. (1936) *The General Theory of Employment, Interest, and Money*, Macmillan. (ケインズ、間宮陽介訳〔2008〕『雇用、利子および貨幣の一般理論』講談社学術文庫。)
- ◎Knight, F. H. (1921) *Risk, Uncertainty and Profit*, Univ. of Chicago Press.
- ◎Knight, F. H. (1935) *Ethics and Competition*, Univ. of Chicago Press.
- ◎小室直樹(1991)『ロシアの悲劇——資本主義は成立しない』光文社。
- ◎黒木亮(2011)「フランク・ナイトの経済学・競争体制批判——シカゴ"学派"再考」『経済学史研究』第53巻第1号。
- ◎Marx, K. (1867) *Das Kapital*, Volume 1, Berlin: Dietz Verlag. (マルクス、長谷部文雄訳)〔1870〕『資本論』第1巻、青木書店。)
- ◎McKenzie, L. W. (1954) "On Equilibrium in Greham's Model of World Trade and Other Systems," *Econometrica*, Vol.22, No.2.
- ◎McKenzie, L. W. (1959) "On the Existence of General Equilibrium for a Competitive Market," *Econometrica*, Vol. 27.
- ◎森嶋通夫(1999)『なぜ日本は没落するか』岩波書店。
- ◎中谷巖(2008)『資本主義はなぜ自壊したのか』集英社インターナショナル。
- ◎日本経済新聞社(編)(2012)『経済学の巨人 危機と闘う——達人が読み解く先人の知恵』日経ビジネス人文庫。
- ◎Newman, P. (ed.) (1968) *Readings in Mathematical Economics, Volume 1: Value Theory*, Johns Hopkins Press.
- ◎Nikaido, H. (1956) "On the Classical Multilateral Exchange Problem," *Metroeconomica*, Vol. 8, No. 2.
- ◎二階堂副包(1960)『現代経済学の数学的方法』岩波書店。
- ◎大内兵衛(1970)『経済学五十年』上下2巻、東京大学出版会。
- ◎Patinkin, D. (1973) "Frank Knight as a Teacher," *American Economic Review*, Vol. 63, No. 5.
- ◎Piketty, T. (2013) *Le capital au XXI siècle*, Éditions du Seoul. English translation: Goldhammer, A. (trans.) (2014) *Capital in the Twenty-First Century*, Harvard Univ. Press.
- ◎Quirk, J. & Saposnik, (1968) *Introduction to General Equilibrium Theory and Welfare Economics*, McGraw-Hill. (カーク/サポスニック、田村泰夫/とち本功訳〔1971〕『一般均衡理論と厚生経済学』東洋経済新聞社。)

- ◎ 酒井泰弘(1982)『不確実性の経済学』有斐閣。
- ◎ 酒井泰弘(1991)『リスクと情報——新しい経済学』勁草書房。
- ◎ 酒井泰弘(1996)『リスクの経済学——情報と社会風土』有斐閣。
- ◎ 酒井泰弘(2006)『リスク社会を見る目』岩波書店。
- ◎ 酒井泰弘(2010)『リスクの経済思想』ミネルヴァ書房。
- ◎ 酒井泰弘(2014)「市場均衡の美学とナイトの異論——競争経済の論理と倫理を考える」、滋賀大学リスク研究センター、ディスカッション・ペーパーNo. J-47。
- ◎ 酒井泰弘(2015)『ケインズ対フランク・ナイト——経済学の巨人は「不確実性の時代」をどう捉えたのか?』ミネルヴァ書房。
- ◎ Samuelson, P. A. (1967) *Economics*, 7th Edition, Harvard Univ. Press.
- ◎ Sandel, M. J. (2009) *Justice: What's the Right Thing to Do?*, International Creative Management. (サンデル、鬼澤忍訳[2010]『これからの「正義」の話をしよう——』早川書房。)
- ◎ 佐和隆光(1995)『資本主義の再定義』岩波書店。
- ◎ Skidelsky, R. (2009) *Keynes: The Return of the Master*, Peters, Fraser & Dunlop Group. (スキデルスキー、山岡洋一訳[2010]『何がケインズを復活させたのか?』日本経済新聞出版社。)
- ◎ Smith, Adam (1759) *The Theory of Moral Sentiments*. (アダム・スミス、米林富男訳[1969]『道徳情操論』上下2巻、未来社)。
- ◎ ソ連邦科学院経済学研究所、経済学教科書刊行会訳(1959)『経済学教科書(改訂第三版)』全4分冊、合同出版社。
- ◎ 都留重人(2006)『市場には心が無い』岩波書店。
- ◎ 宇沢弘文・内橋克人(2009)『始まっている未来——新しい経済学は可能か』岩波書店。
- ◎ 内橋克人(編)(1997)『経済学は誰のためにあるのか——市場原理至上主義批判』岩波新書。
- ◎ 宇野弘蔵(1964)『経済原論』岩波全書。
- ◎ Von Neumann, J. & Morgenstern, O. (1944) *Theory of Games and Economic Behavior*, Princeton Univ. Press.

From the Era of the Cold War to the Age of Uncertainty

The Evolution of Economic Science and My Academic Life
for Seven Decades after the Second World War

Yasuhiro Sakai

Seven decades have passed after the Second World War. This postwar period may be characterized by the transformation from the Era of the Cold War to the Age of Uncertainty. The purpose of this paper is to discuss the evolution of economic science and my academic life for these long and turbulent years. Specifically, I would like to take the two related yet different perspectives — personal and academic perspectives.

In a personal perspective, I was born in Osaka and spent very hard time during and just after the last war: I was nearly escaped from the Osaka Air Attack by American B-29 bombers in March 1945. The end of the war changed everything from the economic conditions to people's philosophy: People's slogan "Down with the U.S. and the U.K. was replaced by the opposite one "Hail the U.S.-Japan Alliance." In 1968, I was abroad to seek my doctoral degree on general equilibrium theory at the University of Rochester. When I was an assistant professor at the University of Pittsburgh, Professor Oscar Morgenstern, one of the pioneers of Game Theory, kindly suggested to me the emergence of a new and promising field: The Economics of Risk and Uncertainty. Since I got back to Japan, I changed my home in several places including Hiroshima, Tsukuba, Uchiura, Kyoto, and Hikone.

In an academic perspective, the Japanese economic society was split into the two opposing schools after the last war: the dominant Marxian school and the minor modern economics school. Although Professor Lionel McKenzie, my mentor at Rochester, taught me "Beautiful Market Mechanism," I was not quite convinced. Nor was I firmly believed in the shallow argument that the Fall of the Berlin Wall in 1989 meant the Victory of Market Fundamentalism. They say that we live in the Age of Uncertainty. In my opinion, this is only half-true because we have to go beyond J. M. Keynes and Frank Knight.

Recent book "Capital in the Twenty-First Century" by Thomas Piketty seems to me a very nice book, possibly showing the way to build New Economic Science. We need a second Piketty in the Land of the Rising Sun.